東ネグロス州ギフルガン市トリニダッド村
Overseas Filipino Worker

文学部英文学科　K. M.

はじめに

私は 2 月 15 日から 17 日の二泊三日をギフルガン市トリニダッド村カラバッラバカンで過ごし、調査を行った。前に滞在していたバゴ市と比べると雰囲気ががらりと変わり、中山間地域にあるトリニダッド村は自然に囲まれ、家と家の感覚がとても広くバイクに乗って移動することがほとんどであった。

ここでは男女問わず出稼ぎ経験のある人やその家族の 3 人に聞き取りを行い、海外への出稼ぎの経験やその収入、家族への仕送り、生活ぶりを知ることができた。

そしてバゴ市で伺った出稼ぎに行った女性達やその家族の話から持った海外出稼ぎ労働者(OFW)の経済的な問題イメージとは違うケースの人々に出会った。出稼ぎを経験した本人に直接話を聞くことができず知りたいことが分からない部分もあったが、日本に暮らす自分では想像もつかない問題や、驚くような暴力が見つかった。そしてそれに対する被害者の考えも、意外な答えであった。そして、出稼ぎに行く人は本当に「貧困」というわけではなく、少なからずお金を持っているという傾向や、それが原因で起こっている問題も見えてきた。

1.　トリニダッド村での聞き取り

インタビュー1：I さん（38 歳、男性）

トリニダッド村では経済的問題による出稼ぎだけではなく職場の上司から進められて日本の職場に行ったケースがあった。それがホストファミリーの I さんである。彼は、小学校の近くでジュースやお菓子から日用品まで売っているサリサリストアという小売店を開く両親と、27 歳の配偶者、5 歳の子供、いとこ、通学のために同居する知人の子供と 7 人で暮らしている。両親はサリサリストアで毎日約 500 ペソ(1,121.12 円：2017 年 3 月 17 日現在)売上があり、生活費は 1 日約 200 ペソ。I さんの配偶者は銀行で働いていたが、I さんが日本へ出稼ぎに行くときに退職し今は専業主婦になっている。

I さんは日本に行く前 31 歳の時、セブ島で常石という船の溶接会社で働いていた。I さんの仕事ぶりを評価した職場の上司が人手の足りない日本の職場へ行く事を進め、35 歳から 3 年間広島県福山市で働いた。契約は 1 年間で勤務は月曜日から金曜日朝 8 時から夕方 5 時まで、そのうち 30 分休憩が 2 回とお昼の 1 時間休憩があり 1 日 7 時間労働だった。I さんは仕事が早かったので休憩は十分に取れていたが、仕事が終わらない同僚は休憩ができないこともあったという。給料は約 21～22 万円。そのうち 4 万円は寮の光熱費などに、1 万円は保険料のために引かれて手元に入るのは 16～17 万円、残業があるときは 18 万円ほどもらっていた。そのうち家族への仕送りは月に約 4 万円で残りは自分の食費や電化製品などの買い物に使ったという。しかし同じ仕事をする日本人の給料はその倍であったと言っていた。日本政府から受け取った在留カードを見せてもらったところ、技能実習生として日本で働いていたことが分かった。日本に行く前は 4 か月間フィリピンで、1 か月日本で言葉の勉強をした。その勉強と飛行機などの

交通費はすべて会社から出され、病気になったときは払った分だけ給料に戻ってきた。帰国後は仕事をしておらず、カナダから輸入した「Intra」という健康飲料を近所などで売り、2～5か月で約 16,000 ペソ収入を得ている。

インタビュー2：P さん（49 歳、男性）

P さんは、49 歳の配偶者と 8 人の子供がいる。P さんは米を作る小作人で、2.5kg を約 100 ペソで売り、年に 2,800 ペソの収入がある。しかし地主との契約では、年間 8,000 ペソを地代として払わなければならない。そのため養豚をしているが売れても年に 4 匹で、売れない時もあり収入は時により様々である。地主に払うお金が足りない分は仕事をしている子供たちが補う。配偶者は主婦をしている。一番上の子供は 26 歳で、水夫として働いている。弟の学費や家族のために、月に 13,000 ペソ仕送りしている。2 番目の子供はサウジアラビアへ家政婦として出稼ぎしている。その前はバコロドのレストランで 1 日 263 ペソの収入を得ていたが妹や弟の学費を賄うために出稼ぎに出ることを決めた。マニラの仲介業者に申し込んで仕事を探し、3 日間バコロド、2 週間イロイロ島、3 日間マニラの 3 週間のトレーニングを終えた後サウジアラビアに行った。トレーニングの費用はいくらか知ることができなかったが、自己負担であった。契約は 5 年だが 2 年ごとにフィリピンに一時帰ることができる。月に 10,000 ペソ家族に仕送りしている。飛行機などの旅費は会社が立て替え、のちに給料から引かれた。不安や問題はもし彼女が病気になっても家族は誰も面倒を見られないことだという。4 番目の子供はセブ島で働いている。3 番目、5 番目は大学に通っていて、後者は社会福祉開発省（DSWD）から月に 3,500 ペソ受け取っている。6 から 8 番目の子供も学校に通っている。家族の 1 週間の出費は子供へのお小遣いを含めて約 550 ペソであった。

インタビュー3：T さん（68 歳、女性）

T さんは、67 歳の配偶者と息子家族 3 人と一緒に暮らしている。T さんには 5 人子供がいて、1 人は一緒に暮らし、3 人はマニラに、1 人はカタールにいる。T さんは秘書の仕事をしていて月に 3,500 ペソの収入がある。5 月と 12 月にはボーナスがありそれぞれ 2,500 ペソの収入があると言っていた。夫はココナッツを収穫し、年に 15,000 ペソの収入がある。一緒に暮らしているのは 4 番目の息子の家族で、その配偶者は高校教師をしている。教師の仕事では月に 22,000 ペソの収入があり、また豚を売って年に 20,000 ペソ収入を得ている。

4 番目の息子（0 さん）は前述の I さんと同じく、上司に勧められて船の溶接工として日本の常石という会社で、2 年半の契約で働いた。I さんとは滞在時期が異なり収入も異なっていた。0 さんは I さんと同様に、平日 5 日間は朝 8 時から夕方 5 時まで、そのうち 30 分休憩が 2 回とお昼の 1 時間休憩が一回の 7 時間勤務だった。毎週土曜日には 40%増しの給料で残業があった。日給は約 3,000 ペソで、2 年半の間に合計 450,000 ペソを家族に送り、現在暮らしている家を建てた。今は豚の販売をしていて、買い手が現れれば年に 20,000 ペソの収入があるという。

3 番目の子供（G さん）はカタールのデパートで会計の仕事をしている。4 年の契約期間を満了した後、1 年ずつ契約を更新して 10 年が過ぎた。出稼ぎに行った理由はフィリピンでは十分な所得を得られないことである。マニラで友達に紹介された出稼ぎ仲介者にお金を払って応募し、マニラのショッピングモールで 3 年間レジ担当の仕事をした後、カタールへ行った。行き

の交通費は会社から支給された。T さんは G さんの収入を知らなかったが、時々500 ペソもらえると言っていた。G さんは家族を持っているため仕送りできる現金が少ないからだ。G さんの夫もカタールでバイクの部品に関わる仕事をしており、学校に通う娘の世話をすることは難しいため、娘をマニラにいる夫の兄弟に預けている。T さんはカタールにいる G さんと連絡を取れていない。なぜなら T さんの住む地域には携帯電話の電波が届かないためである。

2. エクスポージャーの 5 ステップにそって

2－1 暴力

トリニダッド村での調査では、バゴ市での調査とは異なる暴力があった。

まずは I さんから聞いた、I さんと日本人との給料の違いである。しかし I さんは同じ仕事をする日本人の半分しか収入がないにもかかわらず問題だとは思っていなかった。理由を聞くと、日本人のほうが税金や保険料、教育費にかかるお金がとても高いからだと言っていた。一度は少し納得してしまったが、この I さんの考えは暴力の内面化だと私は考える。

次に、不公平な休憩時間についてである。I さんは仕事が早かったため十分に休憩を取れていたが、仕事の遅い同僚は休憩が取れないこともあったという。

P さん、T さんへの聞き取り調査では、やはり同国において十分な収入を得られる仕事を見つけることは難しいという問題があった。また、P さんの子供は DSWD から教育費の援助を受け取っていたが、バゴ市ではそのような人には出会わなかった。受け取れるか受け取れないかの違は何なのだろうか。

T さんの話では、構造的暴力があった。それは電波の問題である。T さんは電波が家まで届かないことが原因で出稼ぎに行っている娘と連絡を取ることができない。トリニダッド村では私たちはトランシーバーを使って連絡を取りあった。しかしそれでも山を挟んだ谷同士では音声が届かなかった。また、トリニダッド村では舗装されている道が少なかったが、I さんから聞いた話では今は政府による舗装の途中で 2 年後には多くの道が綺麗になっていると言っていた。しかし、電波については何もされていないという。なぜ道は舗装するのに電波を普及させないのだろうか。

2－2 自力更生

トリニダッド村での調査の中での自力更生への人々の努力は、フィリピンでは安定した仕事が見つかりにくいことや賃金が少ないという問題に対して海外へ働きに出ていることが見つかった。子供のもとを離れて親が二人とも出稼ぎに出るというケースもあった。一番大きな問題であった日本人との待遇の違いへの対処は、I さんはなにもしていなかった。なぜなら I さんにとっては十分な収入を得ることができたからである。その原因は阻害要因の内容につながっている。

2－3 阻害要因

トリニダッド村の調査では、暴力の内面化をみつけた。前にも述べたように、I さんの話の中に、同じ仕事をする日本人と I さんは給料が半分も違っていた。しかし I さんは出費の差から考えてあまり問題とは思っていなかった。技能実習生として日本で働いていたという自覚も

無いようだった。おそらく「外国人だから」という差別的な考え方が日本人にもＩさんにもあったのではないだろうか。

また、人々の出稼ぎに出ることが当たり前だという意識も国内で十分に収入の得られる仕事が作り出される環境を作ることを阻害している。出稼ぎに出た人の経験やその人々の身についた能力を生かせる環境がフィリピン国内にできれば、人々の考え方が変わるのではないだろうか。Ｉさんや０さんは帰国してからは溶接工として働いておらず、豚の販売や輸入品を売っている。

2－4 連帯

政府などの機関以外に存在した被害者と外部者との連帯は、子供を預ける知り合いまたは家族である。そのような身の回りの人が存在しなければ経済的問題の解決へと歩むことができないであろう。

海外にも OFW を援助する以下のような NGO がある。

UFOQ (United Filipino Organization in Qatar)[1]

これはカタールに滞在する OFW の生活や環境をサポートする NGO 団体である。毎月スタッフがプログラムについて話し合いをし、OFW と国内の人々がともに生活しやすくする活動を行っている。プログラムには家族の収入を管理するためのセミナーや、カタールでフィリピン人と現地の人が共に活動する機会を作る。例えば、スポーツや、フィリピン人のコミュニティと地域の人の距離を知覚できるようなグループ活動など。

APFS (Asian People’s Friendship Society)[2]

これは共に助け合いながら生きることを目的とした、相互扶助組織として設立された NGO 団体である。日本の外国人住民が抱える問題の解決に向けた相談や、外国人住民の基本的人権保護のための活動や調査、研究活動、多文化共生のための活動、ミーティング・講座の実施などを行っている。また、スタディーツアーでフィリピンへ訪問し、フィリピンの NGO や支援団体と交流している。

2-5　関係関与

トリニダッド村では、経済的問題によらない出稼ぎのケースに出会った。訪れた家はバゴ市でインタビューした方の家に比べて作りがしっかりしていて、大きなテレビやオーディオ機器があったりと、生活に余裕があるように見えた。そこで私の出稼ぎに対する考えも変わった。OFW は、日々ギリギリの生活をしている人に比べると金銭的余裕がある傾向にあることに気が付いた。また、海外で稼いだお金を国内で使う量が増えることにより、物の需要が上がって物価が高くなり、生活の厳しい人がさらに大変になるとわかった。また、電波の問題や職を探す難しさ､給料という点においての現地の人と OFW の扱い方の違いなど､インタビューをした人々が受けている暴力に対して何か自分が働きかけ、そのまま解決に繋がるようなことを探すのは

[1] UFOQ 公式サイト http://ufoq.org/index.php/news (2017/06/29 アクセス)
[2] APFS 公式サイト http://apfs.jp/ (2017/06/29 アクセス)

難しいと感じた。それは人々を取り巻く暴力とその環境の規模が大きすぎるためである。しかし自分にできる活動が見つけられなかったのは、まだ学びが足りないからだと思った。報告書を書くために学んだ情報や現地で感じたことを忘れずに、これからも学び続けていくことが必要である。また、フィリピンの現状をさらに理解するために、今回のプログラムで知り合った人達とのつながりを大切にしていきたい。